

提出日：令和 3 年 2 月 26 日
所 属： 獣医 学部 獣医 学科
氏 名： 風間 啓 職位： 助教

I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）				
産業動物内科学研究室に所属し、主に牛の臨床学について教育、研究活動を行っている。また、動物病院の産業動物診療部に所属し、二次診療を通して、参加型臨床実習の充実、実践力を養う教育に力を入れている。				
科目名	学科・専攻	必, 選, 自	配当年次	受講者数
産業動物獣医総合臨床	獣医学科	必修	5	約 150 名
獣医内科学実習	獣医学科	必修	5	約 150 名
獣医畜産管理学	獣医学科	選択	3	約 150 名
産業動物臨床基礎実習	獣医学科	選択	1	約 140 名
牧場実習	獣医学科	必修	2	約 150 名
専門学外実習	獣医学科	必修	5	約 150 名
総合獣医学	獣医学科	必修	6	約 150 名
産業動物臨床実習	獣医学科	必修	5	約 150 名
家畜伝染病学実習	獣医学科	必修	5	約 150 名
卒業論文	獣医、動物応用科学科	必修	6, 4	約 8 名
獣医学特論 I, II	獣医学科	必修	6, 5	約 8 名
科学の伝達	動物応用科学科	選択	4	約 4 名
専門ゼミ	動物応用科学科	必修	3	約 4 名
2. 教育の理念（育てたい学生像, あり方, 信念）				
学生には自分で考えて行動できる人材になってほしい。臨床現場では、動物のため、飼い主さんのため、あるいは社会のために、どのような選択をすることが一番適切かを常に考えなければならない。そのためには、動物をよく診て、飼い主さんとコミュニケーションをとって、いくつもの選択肢の中から自分なりの答えを出す必要がある。そうしたひとつひとつの選択が、動物と人を幸せにすることにつながる、ということを教えていきたい。獣医学、農学的な知識や技術を有するだけでなく、産業動物の臨床を通して、自ら考える力を養い、行動できる学生を育てたいと考えている。				
3. 教育の方法（理念を実現するための考え方, 方法）				

教育の目的と目標（これまでの教育経験においていつも行っていること。重要視していること。自分の教育を特徴づける方法）

産業動物を通して、動物と人を幸せにできる人材を育てるために、学生が自ら考えることができる場を作るように心がけている。

臨床実習では、実際に怪我や病気になってしまった動物の診療に携わり、応用力を養っている。その際、どんな症状なのか、事前に行った検査結果、治療内容などの情報は一切与えず、まずは自分の目で見て、聞いて、触って、五感を使って各自で診療を行ってもらう。その後、オープンクエスチョンにより、自分がその症例に対して感じたこと、考えたことについて、根拠をもって言葉にしてもらう。質問などがあれば、まず自分はどうか考えるか、本人の意見を聞いた上で回答し、必ず考えるという過程を経るようにしている。また、飼い主さんとのコミュニケーション能力を養うために、少人数での班分けを行い、学生間での意見交換の場を作り、互いに高め合う教育の場を提供している。さらに、より知識を深めるために、症例に関するレポート課題を課すことで、自習の機会を設けている。

低学年においては、参加型臨床実習につながるように、必要な基礎知識を身に付けられるように心がけている。より臨場感のある授業ができるように、なるべく臨床現場でのトピックや、時事的なことを取り入れるようにしている。

アクティブラーニングについての取組

- ・少人数班によるディベート
- ・各自が主体となった診療
- ・オープンクエスチョンによる考察

ICTの教育への活用

- ・オンデマンド教材を用いた事前学習

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）

①教育（授業、実習）の創意工夫（B）

②学生の理解度の把握（A）

③学生の自学自習を促すための工夫（B）

④学生とのコミュニケーション（質問への対応等）（A）

⑤双方向授業への工夫（B）

※A（十分実施している） B（実施しているが十分でない） C（うまく取り組めていない）

上記を鑑みて現在の授業実践・教授手法をどのように改善していますか。

短い時間で効率よく学習、実習ができるように、動画教材の充実や実習内容に即したモデルの作成を行っている。特に、動画教材は、授業実施日以外にも視聴できるようにし、実習のた

めの予備知識を学んでから実習に臨んでもらうようにした。その際、必要な教材は実習中にも再度視聴してもらうようにし、知識・技術の習得に努めた。

⑥ 国家試験対策としてどのような取組をしましたか。

獣医学教育モデル・コア・カリキュラムに即した内容で授業を行うようにしている。また、国家試験対策では、産業動物臨床学について、循環器病、呼吸器病、消化器病といった分野ごとに重要な点を抽出し、できる限り簡潔に授業を行うようにした。限られた時間で効率よく試験勉強ができるように、過去の出題傾向や近年産業動物で問題となっている事象なども授業に取り入れるようにした。また、重要点をまとめた資料を作成し、自学の参考にしてもらえるように心がけた。

5. 学生授業評価

① 授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。

自宅でも自習ができるようにオンライン教材の視聴期間を長くした。

できる限り多くの症例に触れられるように、担当する症例以外のものを診る時間を増やした。

② ①の結果はどうでしたか。

自宅での予習復習の時間が思うように増えなかった。

一度に多数の症例を診るため、一頭の考察にかかる時間が足りない時が出てしまった。

③ ②を踏まえて次年度はどのように取組みますか。

オンライン教材を視聴後、対面実習ではそれに関するディベートを行うようにしたい。

時間配分の見直し、ティーチングアシスタントの充実によって、より濃密な教育を提供したい。

6. 学生の学修成果

① 学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。

必要技術習得のため、モデルの作成に取り組んでいる。例えば、牛の採血や注射法について、動物に直接行う前に、練習できるモデル作りを検討中である。また、オンデマンド教材では、牛の挙動について、VR教材を作製するなど、実習前にある程度心構えができるような教材作りを考案中である。

② 教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価

実習時間が長い、あるいは足りない、実習内容が詰め込まれ過ぎている、またはもっとやりたいなど、両極端な意見が多数聞かれた。

7. 指導力向上のための取組（FD 研究会参加状況）

学内でのFD研修会には必ず参加するようにしている。また、オンデマンド授業の講習や、授業の進め方など、セミナーなどを積極的に視聴するよう心掛けている。

8. 今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン）

学生自身が自分の習熟度を客観的に確認できるシステムを作りたい。例えば、自分が実習しているところを撮影し、班ごとに視聴して、良い点、改善点を指摘し合い、客観的に見る

目を養い、積極的にコミュニケーションを取れる場を提供したい。ただし、撮影を嫌う学生もいると思うので、個人の負担にならないようなシステム作りに努める。

9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ

シラバス，學理，FD 研修会